

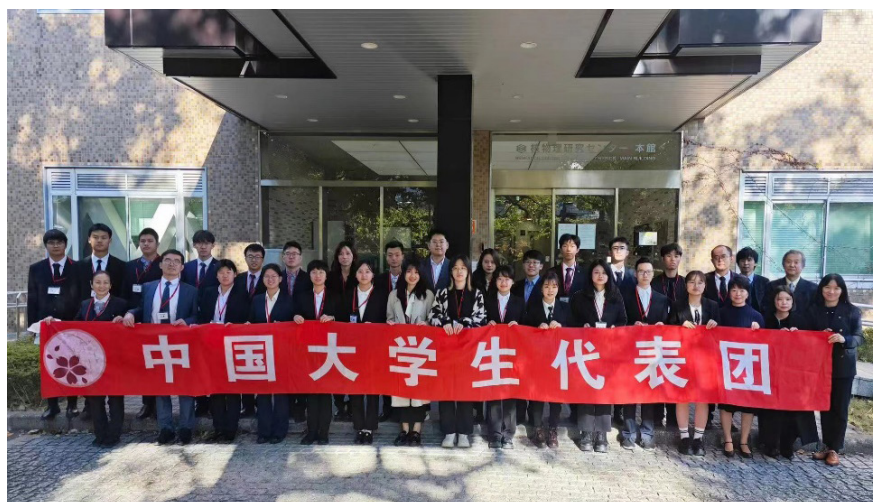
## 着実な進歩、友好的な交流

中国人民大学学生代表

見学日時：2023年11月30日（木）9:00-13:10

見学場所：大阪大学

### 見学概要



大阪大学は私たち訪日団が訪問した最初の大学であった。校門からキャンパスに足を踏み入ると、重厚感のある建物と簡素な歩道から大阪大学の緻密な学問研究、着実な事業管理との学風を垣間見ることができた。季節はすでに冬だったが、この草木は依然として秋の彩りをまだ残していて、青空に映える赤や黄色の木の葉が私たちを歓迎してくれていた。

初めに、私たち訪日団一行はスタッフの案内により核物理研究センターを訪れた。そこではまず訪日団への歓迎の挨拶と共に大阪大学の文化、歴史及び留学の状況に関する紹介があった。その後、核物理研究センターの先生から核物理研究センターの組織やセンター内の精密機器の紹介、原子物理学研究における原理等、詳しい解説を頂いた。

次に、先生の案内で私たちは核物理研究センターの中核施設であるサイクロトロン施設を訪れ、階段に沿って高低様々な角度からその稼働の原理や実際の操作を観察した。サイクロトロンの6つの羽を広げているかのような姿からは原子物理学の世界の不思議さを感じられた。

研究センターの見学を終え、私たちは日本訪問後初の「日中交流会」を迎えた。各大学の中国人学生と大阪大学の学生が5つのグループに分かれ、各々テーマを選び40分間の討論を行った。言葉は違えども皆は賑やかに意見交換をし、各グループ共に討論の成果をまとめた後に代表者が成果の発表を行い、会場の皆は笑顔と共に盛大な拍手を送っていた。

食事の時間となり、皆は一緒に歩いて会場に向かい、そこで新たな「グループ別ではない日中交流」を行うこととなった。皆は会場内を自由に移動し日中双方の学生と文化の垣根を越えた様々な交流を行った。新たな視点、異彩を放つ言葉の融合、美食体験などは今回の大阪大学での活動を強く私たちに印象付けるものであった。

お別れの際、大阪大学の友人らはしきりに私たちに手を振り、私たちもまた車内から银杏の木の下の彼らに向けて手を振り、互いに最大限の感謝と祝福を伝え合った。

## ご存じですか？

問：大阪大学核物理研究センターのリングサイクロトロン（リニアック）の1回の稼働にはどれほどの費用が掛かるのか？

答：人民元換算でおよそ6万5千円である。1973年、研究センターにおいてAVFサイクロトロンが完成し、その後サイクロトロンカスケード計画を実施している。サイクロトロン施設以外にも、RCNPはさらに大学キャンパス外にSPring-8のレーザー電子光施設や神岡二重ベータ崩壊実験施設を擁するなど、基礎科学の研究や教育に独自の機会を提供している。重原子科学研究センターであるRCNPは国際的提携により千兆分の1メートルという極微の世界を支配する基本法則の解明を行うことで、重原子物理学、特に原子物理学の実験研究及び理論研究を推進している。その他、サイクロトロン（リニアック）のビームはさらに白色中性子やミュオンビームなどの二次ビーム生成及び医療用の放射性同位元素の生成にも利用される。



問：サイクロトロン（リニアック）の見学前にまずしなければいけないことは何か？

答：靴の履き替えである。施設に入る前、外で履いていた靴を脱ぎ、ゴム製の「クロックスのサンダル」に似た履物に履き替えなければならない。理由については、靴底についた汚れが入り込むのを防ぐことで実験結果が汚染物による影響を受けるリスクを減らすことが1つで、もう1つは、人体の静電荷を放出するためであり、人体から発生する静電気を地上に引き入れることで、静電気による部品や設備へのダメージを減らすためである。

問：大阪大学の学生は実習をする必要がないのか？

答：日本の大学は学生に実習を強制せず、4年生時に単位が足りない場合は引き続き受講する他、卒業論文や就職活動さらには実習もあるが、これらは学生の任意である。日本において大学院（修士）を目指す場合、実習の経歴については判断要素とはならない。日本の大学院は試験制度が採用されており、可否のポイントは日本語及び英語が学校の求めるレベルにあるか否か、研究の方向性が教授のそれと合っているか否か、及び筆記試験と面接の結果であり、それらが満たされている場合は合格となる。

## 感想

本当の意味での「日本人との交流」は大阪大学の日本人学生との交流から始まった。私たちはついに、これまで何の関わりもなかった見ず知らずの日本人と知り合うことから始まり、次第に関係を構築し、キャンパスライフからサークル活動、成績指標値から将来の就職、医療の現状からコロナ禍の影響、個人と集団、社会国家、日本中国など知っていることや知らないことについて討論を行った。その中で私たちは、彼らは私たちと同じであり、私たちと同様に独りで歩み、活気に満ちていることに次第に気付かされた。同じ少年少女が異なる国で生まれ、異なる運命を背負い自分の人生において輝きを放っている。私たちは言葉や習慣は大きく異なるが、国境を越え、民族の障壁を越え、文化の隔たりを越えて相手方の行動パターンや社会現象を理解しようと努め、またその中で同じ部分や通じ合う部分を見つけ出しそれを宝物とすることができた。人類としての共通点だが、皆がエンパシーを模索する時間はとても貴重であった。

